隨泉寺寺報

平成 20 年（2008 年）7 月号　　第 455 号

℡ 082-892-0217　http://www.zuisenji.com/

浄土真宗本願寺派　高峯山隨泉寺
安居会法座
講師　西向寺住職　板垣公裕師
講題　『なぜお念仏なのか』

『人さんに　堪忍してもらってばっかり　おりますだいな』
因幡の源左

足利源左さんの本名は、足利喜三郎といいます。因幡の国（鳥取県）青谷というところで天保 13 年 4 月 18 日に生まれました。
14 歳のころ、「名開き（なびらき）」という土地の習俗により、自ら源左衛門と称しましたが、略して源左と呼ばれるようになりました。

路頭の聖者と仰がれた一灯園の西田一天香さんと源左さんとの有名な対話。
一天香さん、「何でも堪忍してこらえて暮しなされや」。源左さん、「おらの方が悪いで、人さんに堪忍してもらってばっかりおりますだがやあ」。源左さんの方に、念仏で本当の自分を思い知らされた人の自信と余裕が見られます。

7 月の法座予定

7 月１３日 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 掃除　西長者原
7 月１４日昼席午後 1 時より ・・・・・・・安居会法座
7 月１４日夜席午後 7 時より・・・・・・・ 出張法座　西長者原集会所
7 月１５日朝席午前 10 時より ・・・・・・門信徒の集い　おとき
7 月１５日昼席午後 1 時より ・・・・・・・ 前住職　満中陰（四十九日）法要
7 月２７日午後 5 時より ・・・・・・・・・・隨泉寺ﾋﾞｱｶﾞｰﾃﾞﾝ
8 月　２日午後 6 時より・・・・・・・・・・ 本部役員会

☆門信徒の集い　7 月 15 日（火）午前 10 時～

以前は 65 歳以上の集いと言っていた法座です。若い人は参ってはいけないのかということになり改名いたしました。どなたでも誘い合わせてお参り下さい。

東京の秋葉原というところでは、誰も自分のことを気に掛けてくれなかったということで、見知ら 人を 7 人も車で撥ねたり、ナイフで刺し殺したというような悲惨な事件が起こりました。家庭が崩壊したような、このままでいいのかと心配するような、大変なときを迎えていると思います。こうした時代にこそ、真実なるものを求め、苦悩をのりこえて生き抜かれた、親鸞聖人のみ教えを正しく頂戴することが大切であると思います。

お一人でも多くお誘い合わせの上、ご参詣くださいますよう、ご案内致します。今回のご講師は廿日市地御前の西向寺の住職です。熱心に勉強しておられる人ですから、きっと示唆に富むお話をしてくださると思います。期待しておまいりください。

☆隨泉寺第１５世住職（老院）満中陰（四十九日）法要

安居会法座の御満座 7 月 15 日午後 1 時より高峯山隨泉寺第 15 世住職（老院）の四十九日満中陰法要を勤めます。誘い合わせてお参り、ご焼香くださいますようご案内申し上げます。

☆隨泉寺ﾋﾞｱｶﾞｰﾃﾞﾝ　7 月 27 日（日）午後 5 時～

今年も 7 月 27 日午後 5 時から隨泉寺ﾋﾞｱｶﾞｰﾃﾞﾝを行います。
暑い夏をビールでも飲みながら乗り越えたいと思います。お寺は皆さんのものです。どうもお寺の敷居が高いのではないかと思います。
まずはビールを飲んで、それから少しずつお寺に近づいてください。一人で恥ずかしい人は友達を誘ってきてください。

☆御礼

永代経懇志　金　　拾萬円　三浦　孝男殿　　故　三浦　健治郎様　特 永代経志として
永代経懇志　金　　拾萬円　三浦　孝男殿　　故　三浦　タクヨ様　特　永代経志として

☆御礼

特 懇志　　金　　弐拾萬円　西川　秋子殿
特 懇志　　金　　弐拾萬円　森畠　　茂殿
特 懇志　　金　　弐拾萬円　森畠　敦子殿

東井　義雄カレンダー　　7 月

口よりも耳を大切に

戦前の、農村の小学二年生の女の子の作文をご覧ください。
きょうもおかあさんははたけだろうなとおもいながら学校からかえってみると、やっぱりうちの大戸がしまっていました。わたしはつまらないなあと思いながら、大戸を「よいしょ」とあけました。

戸をあけたわたしはびっくりしました。にわ中いっぱいになにかかいてあります。よく見ると、それは、けしずみでかいたおかあさんのかおでした。大きなかおのところのそばに「やき山のはたにいるよ」とかいてありました。わたしは、けしずみでかいたおかあさんがまっていてくれたので、さみしくないとおもいました。

わたしは、かばんをおろしてから、けしずみを一こもってきました。そして、おかあさんのかおのところのそばに、小さいわたしをかきました。リボンをつけたわたしにしました。そして、おかあさんの方に手をのばして、かたたたきをしているところにしました。

「かあちゃん、かたたたいてあげるよ」とかきました。はんたいがわに「あしたもまってててね」とかきました。

すっかりかきあがったので、手をあらっておやつをたべてから、おかあさんの、かおのところのそばで、ゆうがたまで一ぽんふみをしてあそびました。

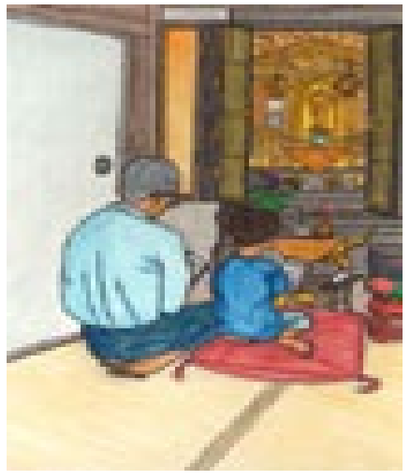
戦前の日本は、今よりずっとずっと貧しくお母さんたちも忙しく、子どもが学校から帰ってくるのを「お帰りなさい」と待っていてくださるようなことは、ほとんどありませんでした。でも、お母さんは、子どもが何を願って家へ帰って来るか、子どもの願い、ことばにならないことば、声にならない声を聞きとる「耳」をもっていてくださいました。それが「お多福」のあの大きな耳になって表現されているのですが、今のお母さん方は、子どもが自殺したくなるほど苦しんでいても、その叫びや訴えを聞いてくださらなくなっているようです。

ですから、仏さまは、「口よりも耳を大切にしなさいよ」
「聞いた上にも聞くことに努めなさいよ」
「一方的に聞くのでなく、その真反対の声も、よくよく聞くのですよ」
「ただ、ことばを聞くだけでなく、ことばにならないことば、声にならない声をも、よくよく、聞いてくださいよ」
という願いを込めていてくださるのではないでしょうか。

義母の忘れられない言葉

宮内　美枝子

義母は昨年 7 月 15 日、眠るように 86 歳でお浄土に帰りました。義母とは結婚後、すぐ同居いたしました。義母は 75 歳まで看護婦として働きながら、
畑仕事、学生アパートの掃除、そして、商売していた私達夫婦のために家事のすべてをしてくれました。



私達夫婦の二人の子どもは「おばあちやんに育ててもらった」と言うぐらいです。

そんな中で義母が言ってくれた一つの言葉を思い出しました。
「私はいい嫁になろう、いい嫁であろうと無理をしたので、美枝ちやん（私）は無理をせんでいいよ」と。

私はこんな気づかいをしてくれる義母に感謝するとともに、義母に哀しい思いをさせてはいけないと思うようになりました。

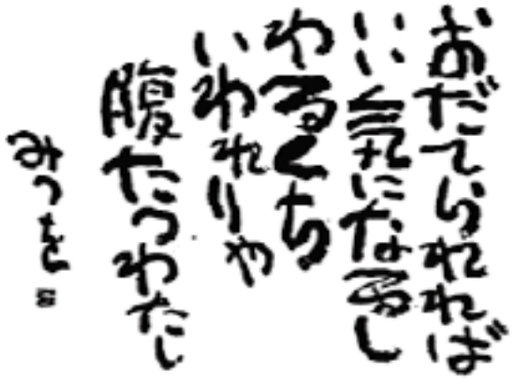
義母が亡くなり、家族で仏壇に手を合わせたり、墓参りする度に、「あの時、お母さん（おばあちやん）がこうしてくれた、ああしてくれた」と盛り上がります。　九人兄弟の長女であった義母は誰に対しても、やさしく献身的な人でした。

最期の時、たくさんの人からの「ありがとう」という言葉に見送られ、私自身も心から「お義母さん、本当にありがとう。」と何度も言いました。

義母亡き後、何か迷ったり、考える時、おりに触れ「お義母さんが喜んでくれるだろうか。お義母さんが喜ぶようにしよう。」と思うようになりました。

義母が元気であった頃、大切な事に気付くことができなかった愚かな私を振り返り、そして残された時間を大切に生きてゆきたいと思うこの頃です。

宮内　美冨子　釋尼芳宣　平成 19 年 7 月 15 往生　86 歳



合掌

おだてられれば
いい気になるし
わるくちいわれりゃ
腹たつ　わたし

相田　みつお